

# ありふれた身の回りの材料を興味深い教材へと変容させる指導法

——2017年度・図工ワークショップを中心にした考察——

佐 伯 育 郎\*

The Methods of Changing Familiar Things into Interesting Teaching Materials:  
Focusing on Art Workshops in 2017

Ikuo SAEKI\*

## はじめに

本稿では、ありふれた身の回りの材料、いわゆる身近材を興味深い教材へと変容させる指導法について考察する。2017年度の図工ワークショップ「オシャレなブーツ de クリスマス！」（12月2日実施）の実践をもとに検討する。

筆者は、「7・1・2」の大切さを学生に伝えている。「7・1・2」とは筆者が考える「授業（保育）の黄金率（比）」であり、教師・保育者が授業・保育を組み立てる際の、理想的な力の入れ方である。授業前7割・授業中1割・授業後2割という意味である。2年次後期の「図画工作科教育法」で筆者が学生に伝えているキーワードの1つである。授業前7割・授業中1割・授業後2割という意味であり、「人事を尽くして天命を待つ」とも換言できる。他教科・領域と同様に、図画工作科・造形表現においても教材研究・題材開発の適否が、授業・保育の成否に関わってくる。教材研究に力を入れると、授業・保育における課題・問題点をあらかじめ認識することができ、子どもの発達段階に応じていかに対応するか、どのような手立てを講じ

るかが明確になる。指導者自身が、指導する題材を自ら体験し、試行することで、指導・援助のポイントを掴むことができ、それが結果的によい授業・保育づくりに繋がるのである。図工ワークショップの場合、7（＝教材研究・題材開発やりハーサル、環境設定等の事前準備）・1（＝ワークショップやアトラクション等の当日の運営）・2（＝事後の振り返り）となる。これまで「7・1・2」の重要性、とりわけ7が大切であることについては度々言及してきたが、事前準備の7の方法に焦点を当てて具体的に述べたことは少なかったのではないだろうか。当日の運営1についてもこれまで言及してきたが、幼児・児童を対象とした学生による指導・援助の方法について十分に論じてきたとは言えない。

そこで、本稿では事前の7に含まれる教材研究・題材開発、当日の1に含まれる指導・援助の在り方について具体的に考察する。読者各位の忌憚のないご批正を賜りたい。

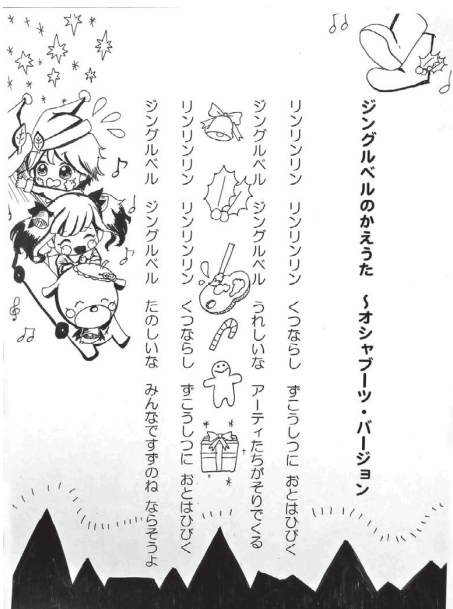
## 1. 身近材を活用した教材研究・題材開発

### (1) 今年度の題材「オシャレブーツ」

今年度は、児童教育コース図画工作専修4年生の発案により、クリスマスのブーツを題材化した。「オシャレブーツ（音+押し笛+オシャレ

\* 本学教授

な+ブーツ)」という題材である(写真1)。クリスマスのブーツがモチーフであり、中に物を入れて置いて飾ったり、吊るして飾ったり、音を鳴らして遊んだりすることができるものである。これまでの図工ワークショップでは使用してこなかった円筒状をしたお菓子の紙製パッケージ(空き容器)を主材料とした<sup>註1)</sup>。円筒状紙製パッケージは、主に成型ポテトチップスが入っているものであり、複数の製菓会社から類似した商品が販売されている<sup>註2)</sup>。蓋にプラスチックや、底にスチールを使用したパッケージもあるが、今回はすべて紙製のものを使用した。図工ワークショップの事前案内を通じて、参加者に当日持参していただくようお願いした。大小複数のサイズがあるが、50g入りの小さなパッケージを推奨した。作品完成後のアトラクションでは、学生が作成したジングルベルの替え歌を歌いながら、オシャブーツの音を鳴らして楽しんだ(写真2・図1)。



【図1：ジングルベルの替え歌歌詞カード(学生作品)】

## (2) 教材研究・題材開発の手順・過程

図工ワークショップの題材は、筆者のゼミ生(児童教育コース図画工作専修・幼児教育コース図画工作ゼミの学生。以下、学生スタッフ)から教材研究を開始する場合もあるが、今年度はまず筆者が試作を行った。文献やインターネットなどで同様の題材を探すところから始めた。様々な資料を参考にしつつ、自分なりに改良・工夫を加えて、まずは作ってみることが先決である。試作を通して、基本形を明らかにするのである。基本形があると、立体・工作が苦手な子どもも見通しが持て、制作に取り組みやすい。試作をすることで、その題材の価値・独自性も見えてくる。様々な資料を閲覧した結果、クリスマスブーツの立体・工作には様々なものがあつたが、筆者が見たものは①フェルトや色画用紙などを用いた平面的なブーツ、②紙バックを用いた立体的なブーツ、③紙コップを用いた立体的なブーツが殆どであった。①も筆者は試してみた。色画用紙とダンボールを用いた平面的なブーツも試作したが、比較的短時間でできてしまい、見た目もありふれたものに留まった。②は紙バックを1個用いる場合と、2個組み合わせる場合の2種類があつたが、見た目が角張っており、ブーツらしくないため却下した。③は高さが低く口が広がっているため、ブーツの形状には相応しくないと考えた。紙コップが円錐台になっており、色画用紙を貼り付けて装飾するにも難しさがある。紙コップは身近材であるが、汚れた使い古しを用いることも衛生上よくない。図工ワークショップでは、身近材の中でも廃材を再利用してきたため、別の主材料を探すことにした。そこで、円筒状紙製パッケージを使用して教材研究をすることにした。装飾には、主に色画用紙を使用し、吊り下げることができるようにモール、音が鳴るように内

部に鈴も取り付けた。爪先は、展開図を手描きして、型紙を作った。結果、基本となる参考作品が完成したが、物足りない印象であった（写真3：右側）。その後、本ゼミのオリジナルキャラクターである図工アイドル“デザイニー”をモチーフとしたブーツを制作した（写真3：中央）。

次に、学生スタッフが教材研究を行った（写真4）。基本形が明らかになった後、題材の可能性を広げるために、他の方向性を探り、色々と試して作ってみることが大切である。今の自分の持てる技能と発想で、工夫して作るのである。楽器・音具の要素を持たせてはどうかという幼児教育コース図画工作ゼミ3年生の発案により、鈴を取り付ける以外の音が鳴る工夫を施すことにした。様々な方向性を探った結果、マラカス、ギロ、ギター、太鼓をモチーフとした音が鳴るブーツが完成した（写真5）。

その後、予想される子どもの発達・実態に合わせて最終的に方向性をまとめることにした。音が鳴る方法にも様々なものがあったが、選択肢が多過ぎてワークショップ当日に参加者が迷ってしまう危険性がある。制作時間が限られているため、学生スタッフも対応しきれないことも予想される。学生の試作には、小さい音しか鳴らないものもあった。そこで、押し笛（鳴き笛）をブーツのソール（底の部分）とシャフト（筒の部分、レッグとも言う）の間に仕込む方法を筆者が考案し、図工アイドル“アーティ”をモチーフとしたブーツを制作した（写真3：左）。筆者と学生とで話し合った結果、基本形を生かしつつ押し笛を仕込む方法に決定した。押し笛とは、手作りの布製おもちゃやぬいぐるみなどの中に入れ、音を鳴らして楽しむものである。押し笛にも様々な種類があり、ポリエチレン製の硬めのもの、蛇腹状のものもあったが、

子どもが押しやすく音が鳴りやすいソフトな直方体のウレタン製押し笛を使用した。蓋には、参加者の写真か蛍光色紙の飾りを貼ることにして最終決定版が完成した（写真1）。ブーツの装飾にはマスキングテープ、ボン天（デコレーションボール）やりボンなど様々な材料を用意し、参加者に工夫してもらうことにした。ブーツに様々な飾りを付ける方法は、ガラス工芸作家の植木寛子の作品から着想を得た<sup>註3)</sup>。教材研究・題材開発の手順を筆者なりに表にすると、以下ようになる。

【表1：教材研究・題材開発の手順・過程】

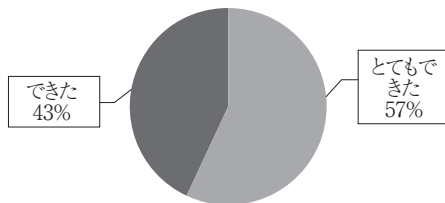
順序	教材研究・題材開発の方法
1	試作を通して、基本形を明らかにする。
2	他の方向性を探り、可能性を広げる。
3	対象者に合わせて最終形にまとめる。

### (3) 参加者・学生スタッフによる評価

今回の教材研究・題材開発の成果と課題を明らかにするため、参加者と学生スタッフ対象のアンケートを根拠として活用し、評価を行う。

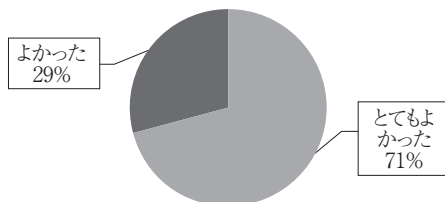
まず、参加者に「身近な材料を用いたブーツ作りと、ブーツによる音遊びを家族で楽しむ」というワークショップのねらいの達成度について質問した。「とてもできた」「できた」「できなかった」「まったくできなかった」の4段階で回答して頂いた。「とてもできた」「できた」のみの回答であり、グラフ1の結果となった。理由としては、子どもは音が鳴るものが好きである、いつも捨ててしまうお菓子の容器でかわいい作品ができたからという回答があった。自宅でお菓子を入れてプレゼントできるという回答もあり、ワークショップ後の活用まで考えておられる保護者もいた。早めのクリスマス気分が味わえた、自由に装飾できたという回答も複数あり、

以上の検討から参加者の評価は肯定的であったといえる。



グラフ1 【2017年度・ねらいの達成度（参加者）】

次に、学生スタッフのオシャブーツに対する評価については、グラフ2の結果となった。理由としては、自由に装飾できるだけでなく、音が鳴ることによって聴覚的にも楽しめる題材になったという回答が多かった。昨年度ワークショップを経験した学生スタッフ3年生の記述には、昨年度の題材よりも作る手順が簡潔でよかったという回答もあった。参加者も、多様なオシャブーツを完成させた（写真6・7）。



グラフ2 【オシャブーツ（学生）】

参加者・学生スタッフのアンケートでは、オシャブーツは高評価であり、深い教材研究が功を奏したと言える。今後も、表1の手順によって新たな題材を開発していきたい。

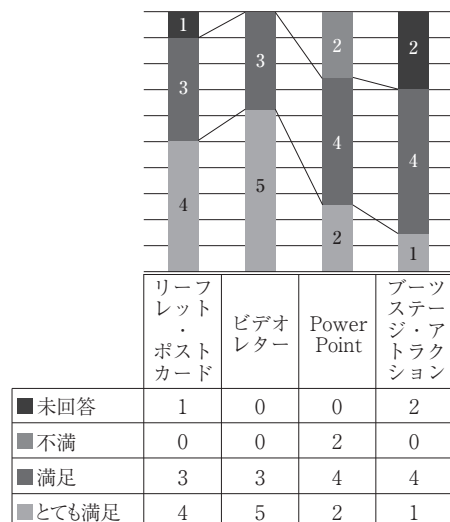
## 2. 参加者に対する指導法

### (1) 物的環境の評価

題材については評価が高かったが、指導法については適切だったのだろうか。まずは環境設定などの物的環境についての成果と課題を明らかにするため、参加者と学生スタッフ対象のア

ンケートを根拠として活用し、評価を行う。

「Q4.今日の図工ワークショップの工夫はいかがでしたか?」という設問に対して、「とても満足 満足 不満 とても不満」の4段階で評価して頂いた。グラフ3の通り「とても満足 満足」が多かったが、オシャブーツの作り方説明用のPowerPointによるスライドショーについては不満もあった。不満のあった理由としては、子ども向けではなく、作り方説明用のプリントも用意してあるため不要ではないかというものであった。昨年度のPowerPointは枚数が多く説明に時間がかかったため、学生スタッフが簡潔にまとめてくれたが、今後はPowerPointを用いた説明自体を省略することも検討したい。

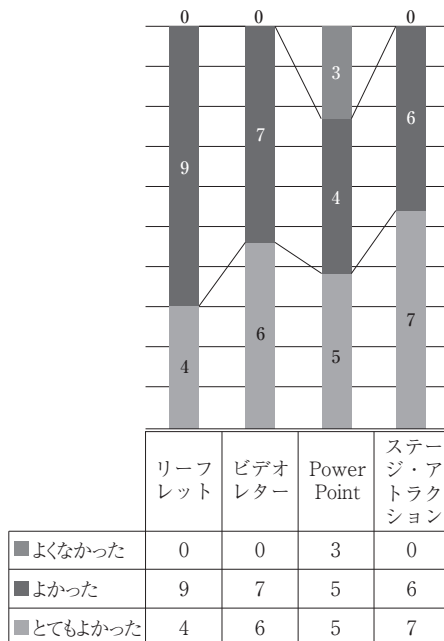


グラフ3 【2017年度の工夫（参加者）】

ビデオレターについては、ブーツ作りの導入として効果的であったという回答が多かった（写真8）。学生スタッフがアーティとデザイニーに扮して熱演してくれたのが制作への動機付けとなった<sup>註4)</sup>。キャラクター紹介のリーフレット・ポストカード・塗り絵もこれまでと同様プレゼントしており、好評であったが、今後は図柄を変えることも検討したい。特に塗り絵は複

数用意していたが、もっと欲しいという参加者からの要望もあった。

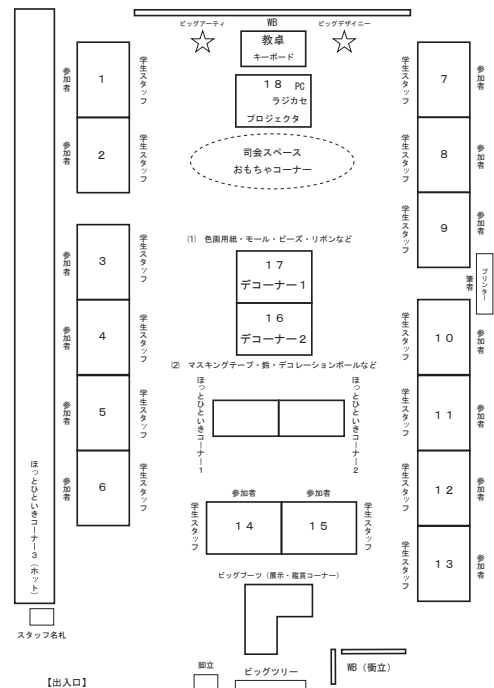
学生スタッフにも同様の質問をした。参加者と同様、PowerPoint には課題が認められた。その他の工夫については評価が高かったが、合唱の際に立ったままオシャブーツの音を鳴らすのが難しかったという指摘もあった。



グラフ 4 【2017年度の工夫（学生スタッフ）】

環境設定においては、単に座席や準備物を整えるだけではなく、制作場面やアトラクションを想定した活動しやすい動線、季節感・雰囲気などにも配慮した。例えば、会場前方には学生が作ったビッグアーティとビッグデザイニーを掲示した（写真9・図2上方）。会場中央には、幼児教育コース図画工作ゼミ4年生が作成した手作りおもちゃを展示し、参加者に遊んでもらう「おもちゃコーナー」も用意した（写真10・図2中央）。作品展示・鑑賞コーナー（ツール）として「ブーツステージ」を会場後方に設置した（写真11・図2下方）。ブーツステージとは、会場

にある机の脚を畳み、2つ並べて床に設置し、蛍光テープで装飾した園芸用アルミステージをブーツ状に並べて載せたものである。学生スタッフによる参考作品を展示し、活動の見通しを持たせる場として設定した。参加者の作品完成後、全員の作品を配置・展示することによって表現と鑑賞の一体化もねらった。参加者相互の表現を認め合う場としても設定した<sup>註5)</sup>。



【図2：2017年度の環境設定】

会場後方壁面には、木製のビッグツリーを懸架した（写真12・図2下方）。ビッグツリーの枝には、参加者が作ったふしぎなネガイコメットをぶら下げて飾るようにしていた。ふしぎなネガイコメットには、特殊インクを使用したブラックライトペンで名前や模様、願い事を書いてもらった。ビッグツリーも蛍光テープで装飾し、アトラクションにおいてブラックライトによって点灯させた（写真13）。点灯する準備の間、参

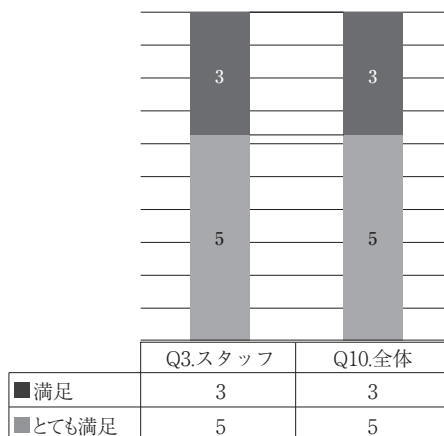
加者には目を瞑ってもらい、オシャブーツの中にお菓子を入れて参加者にプレゼントした。ブーツステージやアトラクションなどについては、参加者・学生スタッフともに評価が高かった。

物的環境は、PowerPoint 以外は適切であったと言える。

## (2) 人的環境

次に、人的環境としての学生スタッフの対応・支援などは適切だったのだろうか。物的環境を構成するだけでなく、参加者である幼児・児童に対して適時に指示、助言、承認、共感、受容、激励などを行い、必要に応じて直接働き掛ける必要がある。

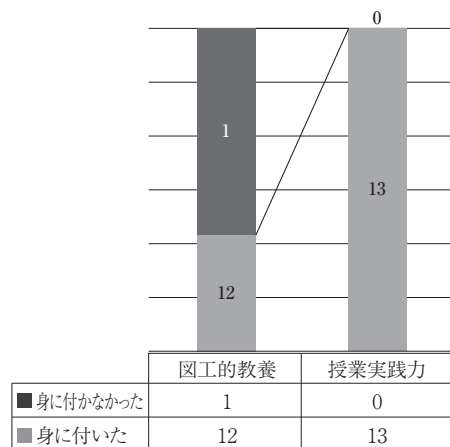
参加者対象アンケートの「Q3. 学生・教員等、スタッフの対応はいかがでしたか?」「Q10. 図工のワークショップ全体の満足度はいかがでしたか?」という設問に対して、「とても満足 満足 不満 とても不満」の4段階で回答して頂いた。グラフ5のようにQ3、Q10ともに「とても満足」「満足」のみであり、満足度は高かった。理由としては、マンツーマンで教えてくれたので姉妹でも楽しく参加できた、分からない



グラフ5 【2017年度の満足度（参加者）】

時でもすぐに援助してくれた、親切・丁寧に接してくれたという回答が多かった。親子とも楽しい時間を過ごすことができた、来年も是非参加したいという感想も複数見られた。

学生スタッフは、人的環境としての自身の取組をどう捉えているのだろうか。図工ワークショップは、対人援助・発達支援職である教師・保育者志望の学生スタッフにとっては、教育・保育実習に並ぶ貴重な経験の場となる（写真14）。学生スタッフによる自己評価結果をまとめるとグラフ6になる。学生の自己評価結果から、図工の教養と授業実践力ともに概ね身に付いていると評価していることがわかる。



グラフ6 【図工授業力は身に付いたか】

筆者は、図画工作科の授業・造形表現の保育を実践するために必要な資質・能力を「図工授業力」と定義している<sup>引用1)</sup>。表2のように図工授業力は、図工的教養（能力）と授業実践力（資質）の2側面から成り立っていると考えている。図工的教養と授業実践力を兼ね備えた教師・保育者を「図工授業力のある教師・保育者」として自分なりに定義し、4年間の図画工作・造形表現の授業を通してその育成を構想・実践している。



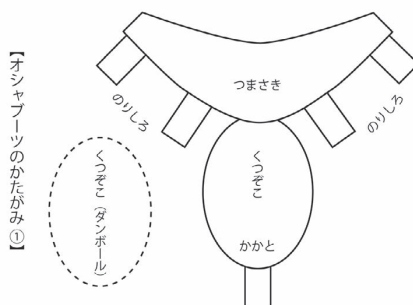
【表2：筆者が構想している図工授業力】

図工授業力	
図工的教養	授業実践力
教科に関する専門性	教育に関する専門性
能力	資質
図画工作科・アートとデザインに関する知識・技術、教材研究・題材開発する力	コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、子どもを支援・指導する力

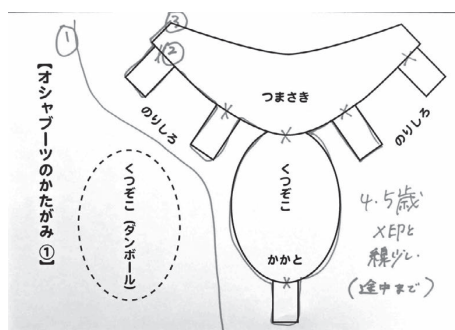
図工的教養が身に付いていないと回答した学生が1人いたが、参考作品を最後まで完成させていないという理由であった。制作途中のまま当日を迎えたのである。他の準備に時間を取られたため、納得のいく仕上がりにならなかったようである。

授業実践力については、学生全員が身に付いたと回答していた。理由としては、子どもが作る様子を見ながら安全にできているかに注目したり、子ども自身ができることを奪わないような支援を心がけたりすることができたという回答が多かった。学習の転移、実習とワークショップとの学びの往還ができているのであろう。司会、アーティとデザイナーを担当した学生は、人前で話す力、臨機応変に対応する力、子どもの心の掴み方、演技力・表現力なども身に付いたと回答していた（写真15）。保護者とも会話ができたという回答もあり、教育実習・保育実習では保護者との関わりは少ないため、貴重な学びとなったことがうかがえた。ただし、身に付いたと回答したが、指導・支援の難しさを感じた学生が2人いた。その学生は、4年生の伝え方や実習園での保育者の関わり方を思い出して対処したと回答していた。もう1人は、担当した子どもが一番早く作品を完成させたいと考えており、はさみの丁寧な使い方を指導・支援するのが難しかったと回答している。

オシャブーツの作り方については、図3の型紙を用意した。学生の試作品を下絵に用いて、筆者がAdobe Illustrator（ドローソフト）によって作成した。



【図3：2017年度で使用したオシャブーツの型紙】



【図4：オシャブーツの型紙に施した視覚支援（学生が再現したもの）】

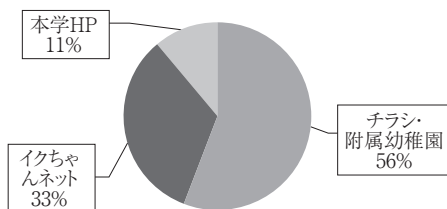
筆者が作成した型紙は、すべて実線で表示していたため、ハサミで切ってはいけない部分も切り落としてしまう危険性があったが、学生たちは例えば図4の様にフェルトペンで補助線を引いて子どもの発達・年齢などに合わせた対応をしていた。他には、参加者のテーブル上に置くネームプレートに色画用紙で作った模様を貼って装飾したり、裏面に「きょうはきてくれてありがとう！！」とメッセージを書いたりしていた。ワークショップ後に参加者に郵送するお礼状も1つ1つ色鉛筆で着色するなど、きめ細かな心配りをしていた。こういった点は、特に筆者が学生に指導してはいなかったが、これ

までの授業、教育・保育実習やボランティアなどで培ってきたものがワークショップの場で自ずと発揮されたのではないかと推察する。こういう些細な点からも、授業実践力が身に付いたと言えるのではないだろうか。課題は見られたが、教師・保育者という人的環境として学生スタッフが比較的機能したと言えよう。

### 3. まとめ・今後に向けて

本稿では、ありふれた身の回りの材料に興味深い教材へと変容させる指導法について、今年度の図工ワークショップの実践をもとに考察してきた。教材研究・題材開発のあり方として表1の手順を考案し、指導法については物的環境・人的環境の側面から分析を行い、成果と課題について省察した。

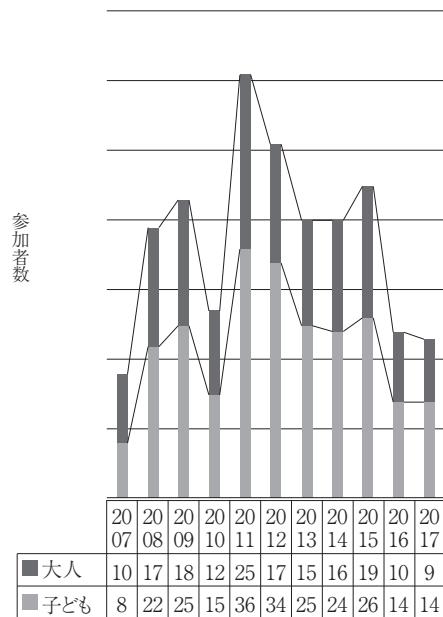
今年度のワークショップ参加者は23人（子ども14人、大人9人、全7家族、座席15組）であり、欠席者は皆無であった（写真16）。今年度のワークショップ参加のきっかけは、グラフ7の通りである。



グラフ7 【2017年度・参加のきっかけ】

学内における11年分の図工ワークショップ参加者推移をまとめると、グラフ8になる。初回（2007年度）の18人からはじまり、平均約37人の参加者がある。減少傾向であるが、会場の面積と動線、学生スタッフの人数などを考えると、図工ワークショップの場合20～30人程度が適正であると考えている。

今回、参加された7家族のうち、リピーター



グラフ8 【参加者数の推移（2007～2017）】

は5組であった。今回が3回目の参加となるのが2家族、2回目が3家族あり、図工ワークショップがリピーターの存在によって支えられていることがわかる。毎回題材を変えていることも、継続して参加していただける要因となっているのではないかと推察する。

西園政史は「子どもが見つめる世界と造形との結びつきは、経験を介した表現として具体物を形づくることになる。つくる行為や作品は、『自分』を再認識し、新たな自分との出会いとなる。作品は、様々な条件のもと完成へと至る。現在の自分自身の心境・過去や未来・他者の存在・周辺環境などが総合的に作品を形成する。」と述べており、図画工作科が子どもの成長に不可欠であると述べている<sup>引用2)</sup>。筆者も西園と同意見であり、図工ワークショップが参加者・学生の成長に寄与していると考えている。近年は学外からの要請・依頼もあり、美術館などでのワークショップも開催している。学外だけでなく、学内でのワークショップについても、今後



も地道に継続していきたいと考える。

## 謝辞

図工ワークショップにご参加の皆様、ご協力くださいました学園統括部、初等教育学科、広島文教女子大学附属幼稚園、関係各位に心より感謝いたします。参加者との連絡関係でお世話になりました初等教育学科助手・黒田愛乃先生、「イクちゃんネット」等各方面に書道・図工のワークショップの案内を掲載して頂きました地域連携室・金子留里室長、園児・保護者に案内を配付して頂きました広島文教女子大学附属幼稚園・栗屋一枝園長に感謝いたします。アーティなどのキャラクターデザインを担当した坂本愛さん（初等教育学科30期生・図画工作専修）にも改めて敬意を表します。本当にありがとうございました。

## 参考文献

- ・今津孝次郎『教師が育つ条件』岩波書店、平成24年
- ・花篤 實・岡田悠吾編著『新造形表現 理論・実践編』三晃書房、平成21年
- ・花篤 實・岡田悠吾編著『新造形表現 実技編』三晃書房、平成25年
- ・今川恭子・宇佐美明子・志民一成編著『子どもの表現を見る、育てる 音楽と造形の視点から』文化書房博聞社、平成17年
- ・河合正雄『まーぼーおじさんと手づくり楽器をつくらう』音楽センター、平成17年
- ・辻 泰秀編集『図工・美術教育へのアプローチ 造形教育の手法 えがく・つくる・みる』萌文書林、平成29年
- ・細見 均『絵心がない先生のための図工指導の教科書』明治図書、平成29年

## 引用文献

- ・引用1) 佐伯育郎「図画工作科における鑑賞指導についての研究（Ⅰ）～教育実習Ⅰの示範授業「ムンクの叫びを鑑賞しよう！」～」(『広島文教女子大学教職センター年報 2017年第5号』広島文教女子大学教職センター、2017年) p. 38
- ・引用2) 辻 泰秀編集『図工・美術教育へのアプローチ 造形教育の手法 えがく・つくる・みる』萌文書林、平成29年、p. 12

## 註

- 1) これまでの11回にわたる学内・図工ワークショップの題材は以下の通りである。表の通り、毎回異なる題材を開発している。同じ主材料を用いて異なる

題材を開発する場合や、複数の主材料を組み合わせる場合もあった。2007年度のアルミアート、2008年度のランパックは作家による既存作品を筆者たちなりにアレンジして題材化した面が強いが、2009年度以降は様々な資料を参考にしつつも独自の題材を開発していった。

実施年度	題材〔タイプ〕 (モチーフ)	主材料にした身辺材	主な彩色・装飾方法
2007	アルミアート (魚)	アルミ缶	なし
2008	ハコニマル (トナカイ)	紙パック	ラッカー スプレー
	ランパック (ランプ)		
2009	ペットカー (生物・車)	ペットボトル・ダンボール	ビニールテープ
2010	ツリース (クリスマスツリー)	ダンボール	色画用紙
2011	でこふれ (写真立て)	ダンボール	色画用紙
2012	ダンドール 〔スタンディングタイプ・シッティングタイプ〕 (サンタクロース)	ダンボール	色画用紙
2013	パッカウス (家)	紙パック・ダンボール	色画用紙
2014	パッケーキ (ケーキ・スイーツ)	紙パック	色画用紙
2015	ダンドール 〔ハンギングタイプ〕 (アーティなど)	ダンボール	色画用紙
2016	パッカー (アートナカイ・車)	紙パック	色画用紙
2017	オシャブーツ (ブーツ・靴)	円筒状紙製パッケージ	色画用紙

- 2) ヤマザキビスケット株式会社ホームページ [yamazak-biscuits.co.jp](http://yamazak-biscuits.co.jp) (平成30年1月20日参照)。成型ポテトチップスとは、ジャガイモをフレーク状に乾燥させたものを生地にして、調味料などを混ぜ、形を整えて揚げたものである。揚げ上がり後の形状も統一できるため、複数のポテトチップスを隙間なく一列にして包装できるという利点がある。ヤマザキビスケット株式会社の商品「チップスター」も、この利点を生かして円筒形のパッケージを採用している。「チップスター」は国内初の成型ポテトチップスであり、1976年から販売されている。ジャガイモを薄切りにして油であげた通常のポテトチップスに

比べて油脂分も少なく、さっぱりとした仕上がりである。図工ワークショップ当日も、ほっとひといきコーナーに「チップスター」を参加者のために用意し、円筒状紙製パッケージは予備として利用した。

3) 植木寛子(1978～)は、イタリアのヴェネチアにあるムラノ島を主な拠点としてヴェネチアガラスの作品を制作しているガラス工芸作家である。2000年でデビューして以来、1年の半分をヴェネチアで過ごしている。日本には個展開催のために訪れ、広島でも毎年個展を開催している。植木の代表作であるガラスの靴シリーズからヒントを得て、オシャブーツに様々な装飾を施すことにした。詳細は、HIROKO ART GLASS ホームページ(hirokoartglass.com)を参照のこと。

4) iPadで撮影したビデオレターにおけるアーティとデザイナーとのやり取りは以下の通りである。これが授業・保育における導入、参加者へのオシャブーツ制作への動機付けとなることを期待した。なお、会話の内容は学生スタッフが考案したものである。

- アーティ「みなさんこんにちは！ 図工アイドル・アーティです！」
- デザイナー「僕はデザイナーです。これからぼくたちはアートのカキに乗って、世界の人みんなにプレゼントを届けるよ。」
- アーティ「ヨーし、出発しよう！」
- デザイナー「あれっ？ 僕のブーツがないよ。これじゃあ、みんなのところにプレゼントを届けることができないよ。」
- アーティ「そうだ！ デザイナーのために、みんなにオシャレなブーツを作ってもらおうよ！ そうしたら、みんなのところへプレゼントを届けに行くことができるよ。」
- アーティ・デザイナー「がんばって素敵なブーツを作ってね！ パイパーイ！」

図工ワークショップ後半のアトラクションでは、学生扮したアーティとデザイナーが会場に登場し、以下のように参加者に伝えた。この会話も学生スタッフが考案したものであり、授業・保育における終結（終末）として機能することを期待した。導入と終結とが対応するように推敲した上で決定した。

- アーティ「デザイナー、すてきな音が聞こえてきたね！」
- デザイナー「どこからかなー？」
- アーティ「あ！もしかして、みんなが歌ってくれたのー？」
- 参加者「そうだよー！」
- デザイナー「すずの音とか色んな音が聞こえてきたねー！ みんな何で鳴らしてたのー？」
- 参加者「これー！」
- 司会「みんな、このブーツ何のためにつくった

んだっけ？」

- 参加者「プレゼントするためー！」
- デザイナー「ばくのために作ってくれたの？ 嬉しい！」
- アーティ「よかったね、デザイナー！ これでやっと、世界の人みんなにプレゼントを届けに行けるね！ みんなありがとう！」
- デザイナー「ありがとう！」
- (中略)
- アーティ・デザイナー「今日は本当にありがとう！ すてきなクリスマスを過ごしてね！」

5) 辻 泰秀編集『図工・美術教育へのアプローチ 造形教育の手法 えがく・つくる・みる』萌文書林、平成29年。辻 泰秀は「造形活動でも、友達の造形表現を見て参考にする、一緒に協力してつくる、友達からつくり方や用具の使い方を教わるといった光景は、よく見受けられる。人をまねる、人から学ぶことは大切なことであり、むしろ模倣や引用から自分らしさを創造することが求められている。『えがく・つくる』といった造形活動をしながら、伝える、励ます、協力する、認め合うといった経験をすることで、社会性や協力性が育まれていく。」(p. 11)と述べており、筆者も辻の考えに同意する。辻の言う「模倣や引用から自分らしさ」という点では、学生の参考作品の展示・鑑賞が機能していたと考えるが、お互いの表現を認め合うという点では、参加者の作品を展示・鑑賞する時間が短かったため、十分機能したとは言い難いのが反省点である。しかし、制作中に互いの作品を見合う場面はワークショップ中にも見受けられたことは付記しておく。

6) 今年度は、広島県世羅郡の世羅町教育委員会社会教育課からの要請により、放課後子供教室との連携で「図工アイドル『アーティ』をつくろう！」を開催した。平成29年8月24日、世羅町中央自治センターにおいて、地元の小学生17人を対象に世羅町教育委員会の方々との協働によって図工ワークショップを実施した。



【世羅町における図工ワークショップの様子】



【写真1：最終決定版のオシャレブーツ（学生作品①）】



【写真2：オシャレブーツを用いての合唱】



【写真3：オシャレブーツ（筆者作品）】



【写真4：オシャレブーツ（学生作品②）】



【写真5：楽器・音具のオシャレブーツ（学生作品③）】



【写真6：参加者によるオシャレブーツ①】



【写真7：参加者によるオシャレブーツ②】



【写真8：アーティ・デザイニーからのビデオレター】

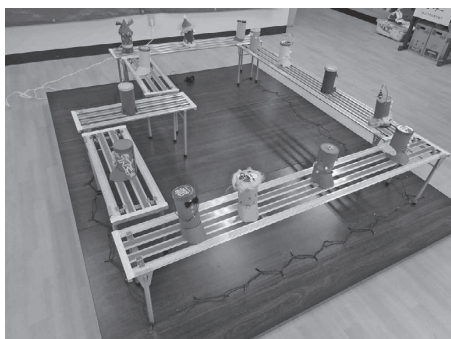




【写真9：ビッグアーティ・ビッグデザイナー】



【写真10：おもちゃコーナー】



【写真11：ブーツステージ（作品展示・鑑賞ツール）】



【写真12：ビッグツリー、ふしぎなネガイコメット】



【写真13：ライトアップ！ ビッグツリー】



【写真14：オシャブーツ制作中の様子】



【写真15：学生扮するデザイナー・アーティ】



【写真16：全体記念写真】